

楚辭子

五



根がしうつゝ巻之五

河合宗臣輯録



一抑大岡秀吉公と申すは天文五年丙申の正月朔卯の上刻尾張西宮郡
中の中村中村は上中下の三ありの氏家と誕生すしう父は中村孫兵衛初の名は孫助とて孫と
織田大和守の鉄炮の者なりしが御多の創と勤り軍役勤めがてききより奉公と
侍しそを所中村の里に居候なり一説は秀吉公の母を指萩中細言の由也
此萱門故なりと尾刈村雲の里に配流せられ所ある毎月を送る所ひしが長
衆の名はききは如の事候ありしなり傾く月と詠めぬひき
休りやる如の月と村雲の如く候なりと云世なりなり
とある條しありる如きは中細言所ありと説は身ありあり中細言此
後室をそ後二室なりありあり女とてなり都より數年如く相見
たりと云孫兵衛孫兵衛都と相見たりと云なりと云と彼身は十
六の年六の時又尾張より移ひたり三年後遷りて十三年の時孫兵衛は身
月と送る如くは女子一人と男子一人と設けり女子は成人の後月金海東郡

乙之村の氏孫助と云ふ者ありありの孫助は三好武敏守とあり又三位
法平一路と稱し孫兵衛公秀次丹波中細言秀勝と和細言秀俊は三人の實母と
一人の男子と云ふ事なりと云ふ事なり大岡大和守一位豊後秀吉公の御事也孫兵衛尉昌
吉天正十二年の夏病死せられ後を後室二人の子と忠告ありて彼里に住せり然
るに孫兵衛信長公の旧朋孫兵衛孫兵衛と云ふ者あり孫兵衛孫兵衛と云ふ者あり孫兵衛孫兵衛と云ふ者あり
孫兵衛孫兵衛と云ふ者あり孫兵衛孫兵衛と云ふ者あり孫兵衛孫兵衛と云ふ者あり孫兵衛孫兵衛と云ふ者あり
是より吉公の法也也なりと云ふ事なり孫兵衛孫兵衛と云ふ者あり孫兵衛孫兵衛と云ふ者あり孫兵衛孫兵衛と云ふ者あり
と云ふ以後は孫兵衛孫兵衛と云ふ事なり孫兵衛孫兵衛と云ふ事なり孫兵衛孫兵衛と云ふ事なり孫兵衛孫兵衛と云ふ事なり
と云ふて大納言は任し孫兵衛孫兵衛と云ふ事なり孫兵衛孫兵衛と云ふ事なり孫兵衛孫兵衛と云ふ事なり孫兵衛孫兵衛と云ふ事なり
田部秀俊と云ふ事なり孫兵衛孫兵衛と云ふ事なり孫兵衛孫兵衛と云ふ事なり孫兵衛孫兵衛と云ふ事なり孫兵衛孫兵衛と云ふ事なり
と云ふ孫兵衛孫兵衛と云ふ事なり孫兵衛孫兵衛と云ふ事なり孫兵衛孫兵衛と云ふ事なり孫兵衛孫兵衛と云ふ事なり孫兵衛孫兵衛と云ふ事なり
おきばと云ふ事なり孫兵衛孫兵衛と云ふ事なり孫兵衛孫兵衛と云ふ事なり孫兵衛孫兵衛と云ふ事なり孫兵衛孫兵衛と云ふ事なり

又一人の如きを朝日唯と申す。源君の御臺と云ひ居る。程なく門原をわさ
せり。南明院殿と申す。しへけ少事也。秀吉公を慶長三年戊戌八月十八日伏見の
よ敷て薨去。一はひり。同年六十三国番院殿俊山。雲龍と謚。しり。洛陽の東
南阿弥陀堂と申す。葬り。しり。後陽成院勅し。廟號と豊國大明神と賜り。り。
一天正壬午六月二日信長公生害。日。後細川義孝傳陸公の門為百額。奥にん
とて存。信吉。し。於て概にきり。

墨澤凡 7 4 名砂 神の宝

藤孝

野乃月の秋風

聖護院
白

松虫音は鳴く

紹
巴

一 日十一年癸未、楚國勝家滅亡の時、そのをみく小谷の所、あはれ中々、八所身、信
 長公の所、妹、ゆきを、城と、とさ、え、は、く、の、め、と、お、し、す、み、よ、ど、と、み、り、を、と、と、み、り、水
 引、の、り、り、り、彼、曰、面、楚、の、夜、の、美、楚、王、虚、氏、が、泣、き、恨、と、却、也、と、思、ひ、あ、る、を、り
 ね、長、部、の、雲、井、と、お、し、の、色、別、れ、を、催、し、ゆ、り、を、と、小、谷、の、所、

さしぬくは折る程を、笈の取の別を、とさばふ時高の那

勝象

夏の取れあはれなき跡の石 涼を升るわけよ 山ほととぎす
 文荷斎と云者 節 萬二 ぬッといふ 夏 へ 同じ 通 日 物 さん とも

驚りあせり啼き道子友よびて後の世を仕へるう那

とある。酒うがれを人々と被とせぬ。さうして、去程は勝家を常家及び智恵
 事なく生害をいさむれを續々と男廿三條人曰じ。酒と酒はよろうど卯月
 たるの申刻。城を度より。又勝家の師常家及是良女とを上村六郎尉とくじ
 て城をおささむるが腹は水の底の城をうとぬ。いづれ燦のえり色。根を所生害よこそ
 し。とある。心算は称名にて現れよ。と末段あり。

今こゝろ六そじ解うの目此
疎^ソ汝^ニ唯一とあるやうにしぬるう

息女を嫁に
取あへ
腹はおとし

は島々小谷の方の
腹はおとしこ

思ひきや市田の軍れ
糸の露ちうと女
消えぬものと云

書きしをきく夏の夜の月

松

はのつゆも 明り 空の 五 雲

日野新太郎

箱の八幡のうら 箱白殿あつしあふて、衣の上せし、あるに松はよもて説言
の心とよもせらるる

つるきとて 衣あふ あふりよ 箱白殿の松のふとちと 君う代の友
関白殿箱白殿の松原あふり 清き水に建ちて、右に興せらる、あつし少花鳥の
事有、あつしとて、松もあつしあふり有し

ふとちと 松のみととの夕あふり 浦風と 浦風と
昔果てあつしあふり、松原の名あふり、人へあふりあつしあふり
松原とあふりあつしあふり、あつしあふりあつしあふりあつしあふり

六月十日あつしあふり、香椎の浦あつしあふり
うの原や 浦風とあつしあふり 松原の松あつしあふり 浦風とあつしあふり
あつしあふりあつしあふり、あつしあふりあつしあふりあつしあふり

古くはあつしあふりあつしあふりあつしあふりあつしあふり

対馬守護宗、対馬守一宿送のあつしあふりあつしあふりあつしあふり
松の浦風のあつしあふりあつしあふりあつしあふり

あつしあふりあつしあふりあつしあふりあつしあふりあつしあふり

卒同和歌韻

始 減逢 君情 可 鍾 白 相 約 對 閑 窓

帝 都 門 外 莫 云 遠 千 里 同 風 一 樹 春

松原のうらや山乃 松原の松 松原の松 松原の松

發り

とて 松原の松 松原の松 松原の松

六月十日あつしあふりあつしあふりあつしあふりあつしあふり

松の音と 松原の松 松原の松 松原の松

あつしあふりあつしあふりあつしあふりあつしあふりあつしあふり

と千宗易より云ふことなる事也

あふさるる心やまを様といふ心や、あつこと同じ浮世に

は七日園白殿花籠敷多れあされ、竹多と生れさる所をなふ、例は
一物に備へる白仕女ものへき世あはれ

夏まきーふれあはれ心もとうけ

まきーさ東平のさころとれ月 松

あふさるる心やまを様といふ心や、あつこと同じ浮世に 由己

七日園白殿花籠敷多れあされ、竹多と生れさる所をなふ、例は
一物に備へる白仕女ものへき世あはれ、秋風日まはるくはるか船は
あつ、六日と還る一物と、あつつけ

あきと吹風や七日の波と海り舟

六日といふ船の出さる風は、周防山口為見ぬ在所の海とあふ島
傍出して、船本とあふさる、七日は山まきふ、今春ハ七夕の夜中なり

あふさるる心やまを様といふ心や、あつこと同じ浮世に

七夕の別の神よりくはるさる心や、あつこと同じ浮世に 旅の衣 斗

八日といふ神社見のくはる、日國ふの天神、遠立あつさ用意せー、あふ本
中寄住持一云無所とて、あつさるさる心や、あつこと同じ浮世に、あつさるさる心や、あつこと同じ浮世に
還る一と、九日

あふさるる心やまを様といふ心や、あつこと同じ浮世に

十日といふ玉府、天神、あつさるさる心や、あつこと同じ浮世に、あつさるさる心や、あつこと同じ浮世に
休といふ、あ社の供僧あふさるさる心や、あつこと同じ浮世に、あつさるさる心や、あつこと同じ浮世に
あつさるさる心や、あつこと同じ浮世に、あつさるさる心や、あつこと同じ浮世に、あつさるさる心や、あつこと同じ浮世に
往延あり天神の所を、あつさるさる心や、あつこと同じ浮世に、あつさるさる心や、あつこと同じ浮世に

あつさるさる心や、あつこと同じ浮世に

あつさるさる心や、あつこと同じ浮世に、あつさるさる心や、あつこと同じ浮世に、あつさるさる心や、あつこと同じ浮世に
あつさるさる心や、あつこと同じ浮世に、あつさるさる心や、あつこと同じ浮世に、あつさるさる心や、あつこと同じ浮世に
あつさるさる心や、あつこと同じ浮世に、あつさるさる心や、あつこと同じ浮世に、あつさるさる心や、あつこと同じ浮世に

十日、曉國志とて、今日より上之岸と云ふ、舟をけし、明の光をまき、はな
りて、舟を催し、はな、岩の山とて、舟を

つゝ、これ、道なりとも、舟をさき、岩の山とて、舟をさき、しん
それ、岩の山とて、舟をさき、岩の山とて、舟をさき、しん
と、廻廊とて、柱をみ、舟をさき、舟をさき、しん

と、廻廊の下津、岩根の宮とて、舟をさき、しん
世部とて、舟を催し、舟を催し、舟を催し、しん
舟をさき、舟をさき、舟をさき、舟をさき、しん
舟をさき、舟をさき、舟をさき、舟をさき、しん
舟をさき、舟をさき、舟をさき、舟をさき、しん
舟をさき、舟をさき、舟をさき、舟をさき、しん

新のつを月や 舟の池の水

舟を催し、舟を催し、舟を催し、舟を催し、しん
舟をさき、舟をさき、舟をさき、舟をさき、しん
舟をさき、舟をさき、舟をさき、舟をさき、しん
舟をさき、舟をさき、舟をさき、舟をさき、しん
舟をさき、舟をさき、舟をさき、舟をさき、しん
舟をさき、舟をさき、舟をさき、舟をさき、しん

秋をすく 舟の池の水

舟を催し、舟を催し、舟を催し、舟を催し、しん
舟をさき、舟をさき、舟をさき、舟をさき、しん
舟をさき、舟をさき、舟をさき、舟をさき、しん
舟をさき、舟をさき、舟をさき、舟をさき、しん
舟をさき、舟をさき、舟をさき、舟をさき、しん
舟をさき、舟をさき、舟をさき、舟をさき、しん

舟の池の水

舟を催し、舟を催し、舟を催し、舟を催し、しん
舟をさき、舟をさき、舟をさき、舟をさき、しん
舟をさき、舟をさき、舟をさき、舟をさき、しん
舟をさき、舟をさき、舟をさき、舟をさき、しん
舟をさき、舟をさき、舟をさき、舟をさき、しん
舟をさき、舟をさき、舟をさき、舟をさき、しん

舟の池の水

舟を催し、舟を催し、舟を催し、舟を催し、しん
舟をさき、舟をさき、舟をさき、舟をさき、しん
舟をさき、舟をさき、舟をさき、舟をさき、しん
舟をさき、舟をさき、舟をさき、舟をさき、しん
舟をさき、舟をさき、舟をさき、舟をさき、しん
舟をさき、舟をさき、舟をさき、舟をさき、しん

明海のや 聲とみくら。雲音よりやまのまこととみくら。
十九日備米の内ひらと云ふ事あり、それより後、宇治門へ来て舟と
あけて懸くおのき世といふ、よりを杭杭の月と云ふは、後藤藤原ハ
舟は舟と何とせん月と云ふ、おのけし海との 師りなりと
そより月の夜舟と云ふは、雲明の瀬戸といふと
船風のよき——むねもそ 雲音ととすけりなる雲明の
風つゝあき、そこの浦と云ふより、人里と云ふは、旅席しゆり
又波のそこの浦より張の月とひめりともあつとも見る
光角ありて波るは船といふと横丁の客といふ通、坂と歌とく—
と云ふを、そをきけりしは、端の—ととあせは
塩とくよき程あきや、なみのきと云ふと、かへ入るは
止り明ちと云ふ船と云ふ、家鴨とこきあふると
いふ計り舟と云ふは、さきとせん 次家鴨と相ひま—やと

娘と云城と船と見くともは後、志めよりちきりわたり海の面満る
と、舟人はるる、水より大雨よりゆきは、おのきと云
水よりいく村ありと云ふは、さきとせん海とあて来よりり
おのきおのきひくさのちと満る、高城の浦は船と云ふ、そを水泊り
高城の屋上のうきと船と云ふ、さきとせんこの浦と云ふと
界が松の浦と云ふと、廿二日の晩、船にのりて、おのきと云ふ、明のわたり
風と行帳と云ふと、さきとせん、後藤藤原よりり
舟の返風と云ふ、明のわたり、行帳と月と云ふと、さきとせん、みれ
さて松の浦と云ふと、舟と云ふと、さきとせん、明のわたり、月と云ふと、さきとせん、みれ
と云ふ

あつし、吹より、水の浦の音と云ふ、浪より——むね有明の月
又繪巻と云ふと、山のまきと云ふ、浪の音を
いくとも、浪をさきと云ふ、さきとせん、山と云ふ、浪の音を

うつ蟬のねうと満き身とめつうしはといふべき
あつ吉云の忠志とねと感し思ふる

一 寛長六年八月中旬熊手新誠御初り此時横井素丹と者清の側より一
角の程なり

○陽徳太平記

くまがきる初き日山 訪ふい友のぬしう那

一 鳴津和とともう像く九列と悉く平均しうる愛は肥後國佐人木太直
入道紹宅と者あり是ハ一揆の魁首と云ふはを罪誅伐と云ふ出
世者ハ連舟の連者として是年上路して於小野社頭連舟のありは
心くる一き月と云ふと云ふ白のありと云ふ

人し色原服はむきぶいりる

と云ふと云ふ時の其の年里村組巴法眼を感称せしうり岩田常の紹
宅と唱て無隠のものと云ふ云々風雅の者非可誅と云ふと云ふ
さう木山不地云百額の連舟無恥と云ふ紹宅はあつおをしうり

あ見よと仙木よのこは標う那

又深木家方と云者内目見はあつうり色は油と連舟の連者くと云く雲の
はきと云ふれと云即ち前年の献しうり有る色は

あ非と云く直き世のねう那

と云うり色と云感ある時腹と賜ふけ者と云天正五年薩戸肥後赤張の
時水腹と云候と云支つうり色は故攻飽候と云有るん或時又文と云と云

秋風と云うかたさ落る木の葉う那

と有るば宗方城を居し矢射と

よせてきーづむ 浦浪の月

と付るうりと云と薩戸幣と云々文武の達人と云べきと云と和梅し
うりは勝る

陰徳太平記

一 薩列可那の福王寺と云ふ一の名石あり是は清和の御とき千里瀧の頑石伝傳
物語に不載也天正の中聖護院道場親王時代は奉侍あり

初きあきあき海へて若のむとさぐ色石とさくつるうね

と祿じはひしう俗唱で硬石と唱へる抑此石を温神たあ家親禁庭より
監に奉りて不寄附也とてき由事とある家親六七歳の時力量高き歎ける
が盛長の後武田判官元信は望ひて上洛す時うて家親大かゆ生人の知りたれ
所くも於て相撲をとりしは又も負るものありしを家親つくく思ひるを
あれた力量はあはしいうまゝと我が力量の名と事世はゆし並に思ひる
不子或時内裡に失火の質起りあれと事案の武士歎くくと此集るそは家親
を嘆息せし通達してまゝは吾が力人びき時くと思ひ弱き弟を加へて歸り
来りしきど時別移て諸人はハ後をうける何の力量もなきとありたり
こつて一こと思ひるや或は内坪の内は大なる石有て見よ調と難及形象と
家親はそは石名なる石と有ん是とあて歸り郷里の福王寺に寄附
して鉄内裏を監に奉りたる石と事世の人は唱へらるべしとあは傍なる人
是ハいふる石とゆふとあはハ是丁を住持おぼしめする石原行山科

の福師の親王よりしる石の蹟の石とゆふと答へ家親ハ好く思ふあれは二三
十人がかゝる石と容易に動う人事とほじいで石を力振るをうんと思ひ
小形は校に築地と云と飛歎け分はあうれと事案の時ゆふと思ひる
ありたる石とゆふと石とあはハ取積に應別はゆふとあは此石と可記の金龜山福王
寺は奇進してより年経て天の末紹也の執事主の連奇郎正元と香川春継と
ととも此寺は系傳しるが正元寺及び石とゆふと詠め入るる時住持は二
人を連奇の地徳也とさく今訪らるる寺の色と案ゆふとあり色ハ正元

ササの上の 萬葉を 風の詩集

住持孝雄殿と付春法門三として百負張りしを連奇の批語とある受領
巴法眼の件へ上より色と詠也あやや家親は石石有と事案とゆふし今
案ゆふと詠あややとてあは秀吉公の所ゆふとあはしきと殿下されい
なる由事あやと事案あり色と詠巴法眼系ゆ一住持おぼしめさる
子とすハ世間ゆふしり、外縁とて七日のこまき、吉祥ちとせしり、右大僧友

系の及行といふ人いまだあり、を、さうござうであつて歸すは、山科の禪師の親王
 あまゝゝ、山科の宮は流離し水をたぐはんとて西へく作らるる、さう
 で居る、さういふ所より、佐々木の子、直くハ、さういふ所へ、さういふ所へ、
 十段、ここに、佐々木の子の、あまゝゝ、さういふ所へ、さういふ所へ、
 紀、國の里の、佐々木の子、さういふ所へ、さういふ所へ、
 の、さういふ所の、佐々木の子、さういふ所へ、さういふ所へ、
 人、さういふ所の、佐々木の子、さういふ所へ、さういふ所へ、
 と、さういふ所の、佐々木の子、さういふ所へ、さういふ所へ、
 の、さういふ所の、佐々木の子、さういふ所へ、さういふ所へ、

あふもいふをかう文えぬ心とるんよしれ
うきれを

とふりける、千里の濱に車とて石を、則ち蘇利福王寺に車之不足はなりと色を
 右圖さふ一月見てもと多ふと色利家と作てはあはれ色所従ふるを後世と
 又かの寺へ送り給ひとて

人皇第一神武天皇丙辰天正十六戊子天皇百九代星霜二千二百三十七年
 朝廷の政を正すのついでに良政の勤に松の如し散失の中に延天曆の
 至る百世を冠する故に北氏今よりして徳と義を愛する輩は大政大臣秀吉を
 牙微賤より起り東夷と争け我とあつて威風凛々周く留ま家を澤山恨
 らくを踰るるし非に家任関白此を人汚た政を一呼一吸の制なき
 ことなり今四月十六日聚樂亭へ召幸おしなり和号の所あり

詠寄松悅和尚

王さまふりあひをやらねう校の代々の笑うとがけんせつ

復日侍
行幸聚樂亭。
同錄壽松程和壽

園白墨長壽草

第代の君のともなき
訓をきん縁木をき
朝の多海万津

詠寄松院和哥

内大長子信雄

糸の上の山ありくふな
 池の傍祿の松の
 木ありき

指大納言源家康

源家の松の事母は此名の子と名の故に歿りてと云ふ事

指丹地云量長秀次

源家の所代と云ふ松原は氏の事と云ふと松原は氏の事

三條松原松原松原

松原松原の事母は此名の子と名の故に歿りてと云ふ事

同十旨所業の所達あり今日院の所所より所經尺と云ふ事

所代は又八百よりと云ふ事と松原は氏の事と云ふ事

殿下より一は所代は氏の事と云ふ事

主上と松原は氏の事と云ふ事と松原は氏の事と云ふ事

後殿下と還所志のひより十九日と云ふ事と松原は氏の事

時と得し玉の光のあらむ事と松原は氏の事と云ふ事

定まると君の所業と云ふ事と松原は氏の事と云ふ事

所業は氏の事と云ふ事と松原は氏の事と云ふ事

有る事と云ふ事と松原は氏の事と云ふ事

有る事と云ふ事

今度奉成行幸義辱次第絶及言上事還似于憚多
矣其上無恙奉遂能還幸之供奉事甚以致恐脱星
微志耳猶不遑伸之候持鋒腰三箇雖有一受之義
甚恐仙洞亦令守御氣色候様宜願御披露也恐々
謹言

四月廿日

秀吉

菊亭殿

初秋青々

中山夜

昂被備

敵陣之如育

御威印是あり

玉より秋さかづよつけと世もむろくあめく光とる人よも

うさくし隙ある雨とあめさや晴とつゝあらくも乃り一むと

あうさくしこゝろとむむふやうあけ陽あさのおしあさうあ

院河制

うりももし道とあしきたあひとあめ荒りの世もくありあき

古人を和奇は海世の音形世の音とよまよむ 河制若殿下の所詠名

後風解とさく就正雅之解 豈非乎 治世之者 式

一 依る内院成政ハ信雄々々秀吉々々海指の時代古信長公の恩と不忘信雄々の所味

方と成しう後和院有しめど他と甲斐あき義と守り何るうと城とめて銀中ハ

郡とるより色見とて相葉肥葉身は揚り一郡中他とよまらさしされは世は
うめしは雲のとき時と忘れどあづき色し

何事とも想う果する世の中よあらでや雲の白く降らん

と古事分つと思ひあらさううう後秀吉公九列退治し時肥後国とてま

よりーとて

一 天正八年秀吉公小田原の城を攻めひ日敷とあきとていすく居城とさすー

青みりと重き上とやど相原はるう困色果るはまへしうハ殿下とて

慰めんと種々の身とさきとし金の扇の白ひいとけきとあき治仕のま

女房たよりさきおとさやーと宣ひをば声うるワーく鳥と催したるを

時の鳴は

さんさうー、さんさうかよと、さんさう金と、めくさき、めくさ

き、さきさきとてな

と福ひしう所金のうとさきさうつう抱きと金とさうさうんるー

るは今又小田原軍難変より討死との事からして知略列松坂下迄
老臣町野近道銀糸仍其女ハ氏卿の乳母なりける事下て彼繪像と原乳母大
將君の自着たるものなりと影像と愛し居るや氏々おたひた富士の数箇
越くはせそ再び降らんる不定し我は友討死也、切おのりたるがうが面解
と知れされいあつてくあふしさきハ汝をわがしと認守が成長の途を見せし
と云合めて松坂と打立たるが先陣後陣と自分往來し日に行旅と下知れり
氏卿が先祖儀成ち赤郷より相傳の総尾の境と下知れおるが彼男私用
係て軍での教令より其居所と遠方事三なる及びあせむ氏卿大は怒り公
用と怪し私用と係て我は云付しるものと遠方事大科し一人を討し百人を
助る事道とるべしとて自づかの男と討せり是と見て備人大は必れ
下知れ至るを捉とてさくさく天下の大石居宙席へおしし中よ主民と
かきよとて道に於て平きき 家康の人数と氏々人殺しとて其吉の目
付やましる事吉宣ひるハ氏々人と殺して法と云ふ 家康も仁信厚き

○関八州古戦録

一 山崎の戦の時一柳保正守直末和守助と云ふ討死し一柳保正は色ハおき吉吉公食事を
おしるが事を吐おしひいて小田原の城より退きしとて討せし事よとて
其後一柳保正は復讐する事三佐法平也其の許より其後の小田原の城也一如院
の住持より云おこせる追悼の所也

あつて色りり一柳のめとるをよとて出よる 野色に 煙き
蒼蒼入道返り

系毛なる 具足といふて 鉄炮の玉もぬける 一柳
一 小田原の城と取巻満陳長陳のうさとしるが事其西江法師の像と誰と云
はるさる事なり

一 星一ツんつけらるる年の端一とて月もと増る五月の空
一 七月九日氏政氏輝要栖と云者の色とて自害する様也

氏政

雨雲の霞る月を胸の音と拂ひはくが船の夕風
我身を清るよといふは舟の空より舟の底より

氏輝

天地の清き中より生きたるは舟の底より舟の底より

ふきと吹風といふは花の葉の底より舟の底より

一 薩列嶋津内小野撫澤舟の底より舟の底より
女は嫁に糸をさる西風在陣の舟の底より舟の底より
るし舟の底より舟の底より舟の底より舟の底より
後又舟の底より舟の底より舟の底より舟の底より
更替(たが)ふ更替(たが)ふ更替(たが)ふ更替(たが)ふ更替(たが)ふ
舟の底より舟の底より舟の底より舟の底より

舟の底より舟の底より舟の底より舟の底より舟の底より
舟の底より舟の底より舟の底より舟の底より舟の底より

舟の底より舟の底より舟の底より舟の底より舟の底より
舟の底より舟の底より舟の底より舟の底より舟の底より
舟の底より舟の底より舟の底より舟の底より舟の底より
舟の底より舟の底より舟の底より舟の底より舟の底より

舟の底より舟の底より舟の底より舟の底より舟の底より

舟の底より舟の底より舟の底より舟の底より舟の底より
舟の底より舟の底より舟の底より舟の底より舟の底より
舟の底より舟の底より舟の底より舟の底より舟の底より
舟の底より舟の底より舟の底より舟の底より舟の底より
舟の底より舟の底より舟の底より舟の底より舟の底より

そそぎあううおひううはつともししん、ゆきのがうーくこそゆへ月全る

五月九日

菊

七川うまの夜はく

秀吉公と門徒ども情あふ事なりとて、御川系女と御船さるるをよりけり、けり、けり、名護屋は系上りて情あふ事なりとて、御船さるるをよりけり、けり、けり、

おごれある事とて、おごれ天津神の心は、かちかち、若の心——さ

則ち、御船——けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、

一説に豊臣公頼朝征伐の時、竜造寺氏の臣、津川系女と云者、新帝の別と、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、

一文禄三年甲午二月廿日、秀吉公吉野の花山院有へしとて、大坂と立寄る也、路を供奉

のつゝ、秀吉公とて、おまをへる、おまの人、御集り、上七、純別六、田の橋と、おまの市、おま、

吉野山、橋のふれ、おま、おま、おま、おま、おま、おま、おま、おま、おま、おま、

又、御屋の、おま、おま、おま、おま、おま、おま、おま、おま、おま、おま、

吉野山、おま、おま、おま、おま、おま、おま、おま、おま、おま、おま、

三位法王、秀吉

御吉野、おま、おま、おま、おま、おま、おま、おま、おま、おま、おま、

おま、おま、おま、おま、おま、おま、おま、おま、おま、おま、

おま、おま、おま、おま、おま、おま、おま、おま、おま、おま、

おま、おま、おま、おま、おま、おま、おま、おま、おま、おま、

一、月、三月、十日、大坂、おま、おま、おま、おま、おま、おま、おま、おま、おま、おま、

明智常高の藤以五郎金基八郎は仕官と河内といふと秀吉公が折付らるる所
一曰と秀吉公伏見と所城より北を流る河内お折伏見の境地八宮河内心の傍より
流るる船の傍より北を流る河内お折伏見の境地八宮河内心の傍より
越つ川流るるより古所より

ひつ川の端は生々所を後散るを花のとりめなりと云
そ外名勝の地かどくとし三室戸と云山の麓は三十三所
以禮札と云り観音堂あり此札寺とも云ふなり

夜とすめと月とを想ふと明のハナは涙の川、涙も互ハふ浪

又所製は皆その月宮の心と西行

伏し見玉の薨^{イカ}と^{イカ}あ^{イカ}ま^{イカ}月の都の歌高き代々

かどのとくさるくの凡系と云は難の方角多しと云城をよお月し定らるる
と云ひびらうらひや

一 解 釋 へ ち せ じ ゃ う 石 田 堀 田 大 谷 三 幸 仍 の 行 狀 と 見 え 三 感 六 位 智 々 ー ー

智翁は此方といふ武通は於て是れ雄也といふ事未だ公これを知りしを以て
 如蒙を以て身と云ふ流るる場田長盛を天竺隱者ありあれは智翁の友我元來
 臆怖也といふ所逃亡んきは惜きとて平生友人等は今もらくこれ歎
 けり今公は此處と云指所の荒なる所日頃の事忽ち變じて公引んと云ふ所
 介ハヤし今附は至て是れ我いふ引んと云へるの如く歎の方へ引向ふべし我
 程も引んと云ふざるを何耳や又少入無二無三は引立歎のまじり建しと
 云ひ之と云ふく事知しる程の老いされ公の志ハ決し是れ公の志と云ふ事
 也是と云ふの通き中島の下也と云ふされ公は人智と義と云ふのとよく傳りたり
 たる程満足の意は非色と云ふ程但馬と云ふ所付より大谷吉継を智翁の友と云
 ありれども右等公は公は立身して今三奉行の列に入ると初ハ朱筆と云ふと云
 文禄四年七月十日開白虎次公高野山に於て所生害の時一日以前公は
 定め置かざりし所文杯沙汰し並に所除明より急き以水と云ふと云ふ
 作事されしが是れ用意やと云ふんも公は是より所お付の處と云ふ事公は

紅の巻と紅楊はゆるる者なり何者ぞと問ふは 徳川家の士成敗小吉ことなり
裸をいふと問ふは 東照言二千石とて作らざしは秀吉ありと云はれ
奉らるる五右衛門と云ふべしと云ふは 東照言成敗と云ふと云ふべし
さ秀吉は仕へんやと作ありきと云ふは 東照言作らざしは秀吉ありと云ふ
海秀吉を奉るは君ありと云ふは 東照言作らざしは秀吉ありと云ふ
食つるを奉るは君ありと云ふは 東照言作らざしは秀吉ありと云ふ
心と云ふは 東照言作らざしは秀吉ありと云ふ
るは 東照言作らざしは秀吉ありと云ふ
正成後集人なりと云ふは 東照言作らざしは秀吉ありと云ふ

一 秀吉伏見にて或日廣岡に出たりしは五右衛門の刀と云ふて千石と云ふは
おしと云ふは 東照言作らざしは秀吉ありと云ふ
ひと何の子細と云ふは 東照言作らざしは秀吉ありと云ふ
べし 東照言作らざしは秀吉ありと云ふ

時と云ふは 東照言作らざしは秀吉ありと云ふ
非と云ふは 東照言作らざしは秀吉ありと云ふ
云ふ大業と云ふは 東照言作らざしは秀吉ありと云ふ
は可いなりと云ふは 東照言作らざしは秀吉ありと云ふ
東照言の所事なり

一 秀吉武時紹也といひ吾等句せん世服白せよとて

東照言は 東照言作らざしは秀吉ありと云ふ
と云ふは 東照言作らざしは秀吉ありと云ふ

紹也言は 東照言作らざしは秀吉ありと云ふ
有と云ふは 東照言作らざしは秀吉ありと云ふ

東照言は 東照言作らざしは秀吉ありと云ふ

と云ふは 東照言作らざしは秀吉ありと云ふ
東照言は 東照言作らざしは秀吉ありと云ふ

日頃の
高しふ秋の月 実遠くの
老うそふらん

江上懷少將忠貞

大方に盡くすべし青の月の日きて名高き

侍從秀一

和の月と一斗金とを
穀と爲言 秋の東に
虎

得從隆系

法之時代とて
作け力重れ今
曾れ月とるま
つけんと

竹從廣家

玉一匹
みきりや
車乃
此月の
若うと
輪照る
らん

惠瓊并

中秋三五夜ス、霄長ヨシ、唐伯和タカラ共俊良一統、乾押ツキ若ト与ト月ツキ、無人不レ通ス、借ト恩光ツキ。

法玄音

月^{ツキ}音^ネの^ノ山^{ヤマ}音^ネ子^コきく^ク婦^フ捨^{シテ}小^コの^ノ新^{シン}と^トお^オよ^ヨバ^バし

法會以

幸はこゝ墨石といふに膏石と書ふに月の光りなりと

法橋紹巴

秋かふちのくま咲きとく
おめあげする。庭の月影

法橋昌北

今看 控すゝゝよまひりやワ一のと山の歌とそふらん

沙弥由已

秋の今宵あづくとおとあそびしき月をみる可那

右の如く
郷の通^ちきも
署一の

一、変長三寸の以高而陳を廻りし者、た時女を教く、本綿と糸とをし、織つて、製作の
 久、以糸ハ麻^{アサ}布と表裏とし、中子綿と入して布子と爲し、て、之をしと、あ、今と
 関、東子と、以、依り布子と、用り、と、り、

一、會長 志永吉 大明神に我武威を必腹にこの船で思ふ心と万民を導くべし

ふらりい 市意は 従へりしうに

芳る利

佛指師連丈日人懐と吐はハそ人とあふむとろしはだれいふこととひし
づき御方の入るまじ

そのつと 重御三平 あひりり

和松魚 家盛むつとまりりむ

その 銀 高時 喰つて死にりりり

えどめい三位中将の将野郎とてかーと何いふまじさるまじ中の方を八幡の
おととのあつとーと人衆とあざるはま束の一向を鎌倉の入道の田楽法師
はめとあざる何とのこそり

一 天正十二年三月より四月と表吉松ヶ崎の城と四方の軍勢とを攻らんとせし城主

越川三富と春日置大膳元盛く臨みては公氏家より本海新田命と云若松川は健ひ
城は必奪りしむる義ありて軍をせむかゝとあつとせは何者うよとらん

城中よりつとる若が三ッあふ 登と風と木海 新田命

右き長久の合戦なりなり

一 秀吉長野を平定して城を寄居金脚と云者より得たる金脚津の祟りまをた殺し

所をなと云て能く死せんとて金脚守居居の忠告を聞きしは中とて小倭将院へ

祈禱しるるを某う兄金脚は定朝臣と云る作さねくを金脚と申先ありて

只身は家敬と云ふし此事は可き某うは後段より云ふ兄の歎き色ハ社政と

放火し神解と打破るべし弟はあはせしる者後段と云き色あると云き

兄の歎き色と云ふ事と云ふ某うはと云て大に憤り小倭将院へ馳ぬけしと云き

書々極るんは死にきり脚之忠告と云て大に憤り小倭将院へ馳ぬけしと云き

作り寄居脚之忠告の歎き小倭将院を攻めと罵り大に放し金と放し金と云て社壇

を徹しお破り神降を破りき大に勝利と云うと云きと云きと云きと云きと云き

是と云て大に怒りしれん脚之忠告の忠告と云きと云きと云きと云きと云き

者こと同じき事あらせしれん脚之忠告の忠告と云きと云きと云きと云きと云き

細きいふ脚之忠告と云きと云きと云きと云きと云きと云きと云きと云きと云き

秀吉公誰ぞと問はば信長公の故き事なりと云ふに云々されり秀吉公は彼
戸田を仕し用ひる者なりと云ふに云々電任せしよしと云ふに云々是れ無終のなりなりし
一或人信長公と云ふに云々曰秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふ

是れ云秀吉公と云ふに云々の信長公は信長公大津が別ありと云ふに云々又
信長公と信長公の味方なりと云々の回道ありしは信長公大津が別ありと云ふに云々又
心を盡ししと云ふに云々のしるん世なる事なりと云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふ
評客ありしと云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふ
かき事ありと云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふ
心別なりと云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふ
の心なりと云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふ
信長公は天下を治めんと入る事なりと云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふ
一信長公は天下を治めんと入る事なりと云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふ
人なりと云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふ

道と云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふ
中より信長公は天下を治めんと入る事なりと云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふ
て孝經の序なりと云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふ
聖人と云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふ

一秀吉公通の記

秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふ
里ぬ彼地の用事言はれしと云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふ
はそ無残なりと云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふ
丑六日と云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふ
八月と云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふ
と云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふ
指すと云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふに云々の秀吉公は天下を治めんと入る事なりと云ふ

徳元寺に於てよるるふれふ歳後とれくぬふ——より
又川の埔の眺望

名所——あ田ふれ埔迄まで又と来てるん富士のふき

かの老翁のふき書にけ違ひぬふし

一 文禄三年秀吉公名護屋陣の御六月廿八日の事なり此細部廣く傳ふ
たる所は故に其意をさうとて廣くいふと此所は其の事とあされつ
各事と意の又所とて思ふに、長陳の事と補ひ多し、此所は其の事
惟とのさき——この事、此中、其意と此所は其の事とあされつ
なる——と有——此所、高人も違ふ所とあされつ、なる——なり

一 長島三役、此中、其意と此所は其の事とあされつ、なる——なり

門後せし神事とあされ、老の波移る目日とあ川の波

法平に陳なり、あ川の上より山の岩なり、さへおねり、此所は其の事とあされつ

一 小山、此所は其意の家督、此所は其意の家督、此所は其意の家督、此所は其意の家督

の後、秀吉公、此所は其意の家督、此所は其意の家督、此所は其意の家督、此所は其意の家督
津、此所は其意の家督、此所は其意の家督、此所は其意の家督、此所は其意の家督
小山、此所は其意の家督、此所は其意の家督、此所は其意の家督、此所は其意の家督
あ、此所は其意の家督、此所は其意の家督、此所は其意の家督、此所は其意の家督
なる、此所は其意の家督、此所は其意の家督、此所は其意の家督、此所は其意の家督
記、此所は其意の家督、此所は其意の家督、此所は其意の家督、此所は其意の家督
苗代、此所は其意の家督、此所は其意の家督、此所は其意の家督、此所は其意の家督
小山、此所は其意の家督、此所は其意の家督、此所は其意の家督、此所は其意の家督
小、此所は其意の家督、此所は其意の家督、此所は其意の家督、此所は其意の家督

兼載つづり 其意と なる

と、此所は其意の家督、此所は其意の家督、此所は其意の家督、此所は其意の家督

小山、此所は其意の家督、此所は其意の家督、此所は其意の家督、此所は其意の家督

と、此所は其意の家督、此所は其意の家督、此所は其意の家督、此所は其意の家督
と、此所は其意の家督、此所は其意の家督、此所は其意の家督、此所は其意の家督
表、此所は其意の家督、此所は其意の家督、此所は其意の家督、此所は其意の家督

後、やうに長政の事ごとく吾武勇と云ふ事なき時と云ふ又ハ備後栗山と
お傳りし羽部は源又と後の足利様と云海軍が按より大勢は勝つるべ
世恭平のきこえとて武功となし満徳いふ事あると吾と敵事海とあるべ
とと勝立事し但馬を腹中しめんと汗と流し但馬のたつと向て敵軍
怒よか人の子功名一のと云ふ僻事とてたせざる作と長政とん向とて
長政のやうな事と云ふといふと怒らし但馬打突の心と云ふとて少くも武功の事
な事は事と云ふおひしうと思ふ事ハなき事あるおとて他人の心か
と腹中きと然して云ふは海軍を引身し世の利よくて幸は勝つると自賛
おとてきか外む言めてこそ今迄の海軍は別く無なることと云ふとな
らハ必勝ありし味方軍とて討死し殿の将おそれハ大将の道と云
味方と討死し軍は勝を自ぬき殿の将をむ一途を将の道と云ふは
當はあり一途の道と云ふは世の利の道ハ備後と老功の者さるる間せ
備後敵一人かめて討死し事ハ事ある者の業と云ふは勝と大将の道

よある事と云ふは討死と云ふは敵の将と云ふは長政の怒と云ふは余
ちう備後と云ふはの事と云ふは海軍が按より大勢は勝つるべ
懐と顧みんぬと云ふは勝と云ふは海軍の利と云ふは長政の怒と云ふは余
おとてきか外む言めてこそ今迄の海軍は別く無なることと云ふとな
らハ必勝ありし味方軍とて討死し殿の将おそれハ大将の道と云
味方と討死し軍は勝を自ぬき殿の将をむ一途を将の道と云ふは
當はあり一途の道と云ふは世の利の道ハ備後と老功の者さるる間せ
備後敵一人かめて討死し事ハ事ある者の業と云ふは勝と大将の道

我より申さるる者めと吞うては跡をいふく飲せよとてなるとき一時
但馬より今申し申して着き着き随分然うは詞と掛帳一がせなるを
氣隨のあらぬ處にまゐるは大事なるやいとていふとていふとて
長政國ぬらうとて収めたり

一 福島正則名をお荒く人と誅する事を好むる上その人云わたり或時直るの上の
の智^{トガ}わたり城門の橋を押こめ食をとりて飯死せしとていふは其の恩を
よりし常道場主罪からりける有れと痛み涙を流し飯と飯をとりて彼士
を罪有なかくぬき海兵卒の志^{シテ}動とす一飯をとりて吾うも罪をあらん人飯
を食ひしとて命助うべきは涙をいへく陽世とていふは常道場なるは目ドも罪は
つるは後悔なし吾うは罪を殺するべき事の育一は君の救を助うのひめ恩と
ありて執せざる人^ハ罪にこめとて又いふにける心あるとて吾志をきく一は常
は情をいへは彼士恨てさうは是と食ひ飯をあらくのどく一うらう後
陣で死するものとして正則を食ひ飯をせしは執せざるは哀れは正則は飯を

送る者なりとて思ひしは常道場を来て其をて送るべきもの正則は
暇^{ヒマ}をのせゆわかく一うらう後二つ切り割りめんと膝を垂さき一時常道場
孫^ハる吾若輩とて飯を水漬りあいて殺さるべかりしは彼人の一いふきたりし
を今日と思ひしは今飯^ハをいひきそ恩を報んぬるは必中思ひて飯と運びゆとて
正則は眼を涙を流し海が志感ざるは情ありかこも有べきは彼士も救^{ユル}
ふよとて佐々木の戸をきき罪を聞き一常道場とて涙を流し一うらうは暴
悪の人とす稱一はききけるは是は感する事の切なるは士のおひ着ひて力を施^{ツク}
正則の爲は身^ハを捨て奉る一うらうはけいふは常道場はこと

一 正則平生を常道場とていふこととて直馬島山殿下或時正則の茶徳^{チトク}はねえ
て別が世ありとていふ事あり常道場井飯供をらるぬゆふはあはし病をなすと西則
出連へていふ一うらうは常道場の常の正則^ハがあらぬとてお拂をあらう常道場井
飯をいふ一うらうは常道場の掃除するぬきものあらぬとていふ一うらうは常道
場をいふ一うらうは常道場の掃除するぬきものあらぬとていふ一うらうは常道

の招き地の舞うりて中つ神社よりそつてこまめとておまびで勝よとけめ。
と足下の御迎ひ一程よとめしえおせしとうのし地のあまひきうひてあじ
の役し事よあんとて笑をえはてふ別といと息ありてそとと離れく思ひぬ
一 荒れ相重く持の首を敵敵うの時長きなる事よとよなり

君よむく荒れどもこの世遠ひいふよりをぬ有るの味
このひ村重信長とて有る事とていふるなり

一 村重く家入池田和泉とて者母母の敵は居るう有るて辞世一首とてみえ
地を築きとてあごと改とて新しき自新をいふ事なり

吾等の身の清きと心けりぬく何となくんこころの末

一 勝別よ白子本丸のよと云者あり吾等の達者秀逸なり有意則おなり神々三七念を
と勝どとてあひあつて戦ひよ事今な勝別よと勝利の大功とていふ事有る事と
世人脚りよえぬしりきる事年なるの武功とてあまふ事直人よ勝べといふ事
とるに勝別よとていふ事功とてあまふ事直人よ勝べといふ事

其の事を感し入るて定まらるる事とていふ事

福二ある三本ありと切替ておめと山の太木とてなり

秀吉大に感じし程に勝る事とていふ事

一 相列小糸の幕下佐佐木の敵は天徳寺豪傑の事なりいふが或時琵琶法師とて
平家と信らとていふ事とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事
事とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事
や河川のよとていふ事とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事
あつていふ事とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事
中より天徳寺又天徳寺は及べり後には家臣の事とていふ事とていふ事とていふ事
きうつとていふ事とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事
前後二曲とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事
涙は咽をきしていふ事とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事
いといふ事とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事

けふふと此を始別の風よこそぬれき又そは如き事地ふ女といひ士なり
そふ人といひし者き翁亡友こそ又宋女ふ女といひと人といふとて
とある事やある事なにも海等必まづいひかゝるをいひて彼はあつたよしと
かへ後て我はあつた事象戯は得るといひいひをみせぬもの也いひしこといふ
是へいふあつた人といふとていふいふとていふ又いふとていふいふとていふ
いふとていふいふとていふいふとていふいふとていふいふとていふいふとていふ
も也又そは如き事地ふ女といひと人といふとていふいふとていふいふとていふ
き事と金銀といふとていふいふとていふいふとていふいふとていふいふとていふ
臆病の唐名ときこふべし侍侍の時 文廟といふとていふいふとていふいふとていふ
ある事とそは如き事地ふ女といひと人といふとていふいふとていふいふとていふ
事いふとていふいふとていふいふとていふいふとていふいふとていふいふとていふ
いふ文雅風流といふとていふいふとていふいふとていふいふとていふいふとていふ
とていふいふ文辞の末といふとていふいふとていふいふとていふいふとていふ
とていふいふ文辞の末といふとていふいふとていふいふとていふいふとていふ

自うう道は省くともあつた事地ふ女といひと人といふとていふいふとていふ
とていふいふとていふいふとていふいふとていふいふとていふいふとていふ
北条氏とていふいふとていふいふとていふいふとていふいふとていふいふとていふ

北条氏とていふいふとていふいふとていふいふとていふいふとていふいふとていふ

氏名とていふいふとていふいふとていふいふとていふいふとていふいふとていふ

氏名とていふいふとていふいふとていふいふとていふいふとていふいふとていふ

一 氏名とていふいふとていふいふとていふいふとていふいふとていふいふとていふ

一 氏名とていふいふとていふいふとていふいふとていふいふとていふいふとていふ

一 氏名とていふいふとていふいふとていふいふとていふいふとていふいふとていふ

一 氏名とていふいふとていふいふとていふいふとていふいふとていふいふとていふ

一 氏名とていふいふとていふいふとていふいふとていふいふとていふいふとていふ

一 氏名とていふいふとていふいふとていふいふとていふいふとていふいふとていふ

一 氏名とていふいふとていふいふとていふいふとていふいふとていふいふとていふ

一 氏名とていふいふとていふいふとていふいふとていふいふとていふいふとていふ

そくそ誰と買つた可うに元を引くゆゑとせし山内がゆゑとて信
長より買つた可うに、あつた信長が買つたて、天下は買つた人なりと買つた可う
引く可うしと元を引くゆゑとて、山内がゆゑとて、元を引く人なりと
あつた可うしと元を引くゆゑとて、山内がゆゑとて、元を引く人なりと
と武士のこゝろが、信長と感づき、大なる元を引く身とて、元を引く
一、稲葉伊豫守一徹、信長に感づき、信長に解け、信長に感づき、信長に感づき、
とて、信長に感づき、信長に感づき、信長に感づき、信長に感づき、
の緒の語とて、信長に感づき、信長に感づき、信長に感づき、信長に感づき、
馬不前とて、信長に感づき、信長に感づき、信長に感づき、信長に感づき、
子細とて、信長に感づき、信長に感づき、信長に感づき、信長に感づき、
勇士とて、信長に感づき、信長に感づき、信長に感づき、信長に感づき、
信長に感づき、信長に感づき、信長に感づき、信長に感づき、
三人皆懐剣とて、信長に感づき、信長に感づき、信長に感づき、信長に感づき、

いられ、三人のお伴、信長に感づき、信長に感づき、信長に感づき、信長に感づき、
素く、信長に感づき、信長に感づき、信長に感づき、信長に感づき、
ね、信長に感づき、信長に感づき、信長に感づき、信長に感づき、
世に、信長に感づき、信長に感づき、信長に感づき、信長に感づき、

一 信長公方、昭郷へ、信長の時、連、信長に感づき、信長に感づき、

二 本、信長に感づき、信長に感づき、

一 高、信長に感づき、信長に感づき、信長に感づき、信長に感づき、
ね、信長に感づき、信長に感づき、信長に感づき、信長に感づき、
ね、信長に感づき、信長に感づき、信長に感づき、信長に感づき、

高、信長に感づき、信長に感づき、信長に感づき、信長に感づき、
高、信長に感づき、信長に感づき、信長に感づき、信長に感づき、
高、信長に感づき、信長に感づき、信長に感づき、信長に感づき、

一 永福十二年六月十七日夜、信長、川、信長に感づき、信長に感づき、

の者も橋詰を立拂ひ福徳の安んずる人といふ人跡も居るなり橋と鉄道の
十回五回あるに城を築城するにせんとせしと氏規押するなり城を築く
下は城といふにせしとせしと氏規押するなり城を築く
四人の者と助けたる氏規はるるなりと三股計四人の者は城を築く
筒を打つるなりとせしと武者の胸板を打つるなりと武者は城の中
即ち倒れ死するなり

一 天正八年七月九日氏規自害し氏規は平二年とぞ此時氏規は平野山に
登山の後大坂より三股へ往くなり其のとき氏規は平野山に登山し
其のとき氏規は平野山に登山し其のとき氏規は平野山に登山し
死するなりとせしと武者は城の中即ち倒れ死するなり

一 天正九年西家上洛するに氏規は平野山に登山し其のとき氏規は平野山に登山し
其のとき氏規は平野山に登山し其のとき氏規は平野山に登山し
死するなりとせしと武者は城の中即ち倒れ死するなり

是しりきハ秀吉富田を過るに作るハ西家上洛を隠保なりと云ふなり
富田より信長を逃れし時君が安んずるなりと云ふなり
一 天正九年西家上洛するに氏規は平野山に登山し其のとき氏規は平野山に登山し
其のとき氏規は平野山に登山し其のとき氏規は平野山に登山し
死するなりとせしと武者は城の中即ち倒れ死するなり

と定りし人々をえ 家康一万余人同家康子五千人を介太名親軍故金十萬二千
兩十人とも海海の人數に想軍務合三萬九千九百八拾五人と記し今年文祿元
年と云ふ同年十月廿八日秀次園方^任往し天下の政事をつかさどる是より秀吉と太田とより
一太田三景は内太田下野と云ふ士人々と識るを遠くより三景といふ故ぞと
とふ下野別の子細といふべしと云ふ連年ある者の古きと云ふは我連親の意は
せんとも士の切なりと志し者もふかしくせんとの隙に好まぬ仍てあしひくは
八九を遠くひかぬものことぞと云ふ

一 藤生氏郷の件は佐々木・純といふ名なき者あり河川忠良いとはは我は郷に
乞せしう八直野某これと人な信するおそれ似る建を解りぬといひ色ぞ
氏々

あき名ぞと人はきつひて如みあふ——心のこころいふ 善人
と云ふ所の解りしきとてかの純と解らざる又安土郡小川の河内は建郷と
いふと云ふ六氏郷の領地なりし一、建郷は佐々木政家の領地とて争ひありしは

氏々争ひの事々の事

と云ふ所の事なりとされしは少人建郷を安土と云ふ所よりさうく分明とて政家
争ひと云ふなり

一 小糸早雲盲人を己用の者とて小田原城分のめくは時と機を海にふしつけは
ちりんと有る一、如き人なる思ふは近なるを中代とては関は甲はら色

永禄

一 永禄の中備前上道郡は、山の城に宛下治に元者と云者ありは時浮田直家
縣は浦上と滅し沼城を有る元者と城類ありしは元帝毛利家はあつて
あるは背くある討滅さんと思つとも、建の口を背き多く大河は流るは
害ありきハカ攻より後べきはよく矢陣は等と構へ軍兵と必死を云ふ
あるは細といふ保りある者は密うよくと云ふを或はある物ふくの一の罪
あり搦め来る首と別んと云ふ一、めを討ちの士は印を多くお寄しと云ふある

偽て怒る大形ありて脚助を傷中し陽を病うるが西那の肉をてえ食の老女の道は
即ちうらまきありこゝとて不忠の道なき相見しるよの心志をてゝるま
せしはゆきあるこゝを離しゆきさても後居しきる旅やとてえ忘るひてん
知事時立別色なつろの母上とて連れ物うぬえ食の女に怪すると思へた飲ま
なる身はあきと知る女作もて有るに有て脚助の川向の金山寺山の金山
船山の城主頭と本をあるが科は仕へ尋あたるえ食の老女とて母と名付て人知
出しうり涙と水きあありて元常は不和也或時泣く水が東を求めねる馬を盗
こかし打棄山下の地中へ何とては棄るやと嘆きまをねるも入るに牧
石河原とて東へ地中へまを泣く水も矢倉より見えて思ふに母討止よと
下知しる色とて川を折流り流の川の城は棄上り船山の次と水が士とて故なきは元
罪とてある理と人の知るせいて道なきありてあきとて流るの者凡川向はとら
ての城の中は遠きとていへと云る色は元常とて山は隠しをりり泣く水が士は思ふ
能きとてと知るべかのえ食の老女と河原よりあし流るべ母と知るべとて声く

は鳴りうり罵りうり老女も母とていへとて流りうり母を二下り死ねんて定りうり
仲とて死ねる命とて思ふまじり世慣りと教どめんと云る中へ彼老女も母とて
教しり色ども物おも思ひ母仇目なまありいへとて世恨と知るべとて當
とて嘆きり色ども元常とて思ふとていへとて思ふとていへとて思ふとて思ふ
る中へ元常が密にうりうり泣く水も母とていへとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふ
は岩の軍兵と流の川の老女は川向はあきとて小舟と隠し墨色よと告ぐとておまじり
叔父のに本をのぶるは河原の有るうり元常軍兵定る中へとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふ
千は傍り居るとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふ
つく中へ一刀刺しとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふ
道なきとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふ
守らせり

一 上列筆端の極長野信流るる屋の草をまきとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふ
室の向へ五六尺斗の地あるは女男とよびあきとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふ

常山 常山 常山

いともいへば世間とは多田金育の者なりけの形なりける詞をいふまゝののち仲
るの気はさくせぬとぬきひしめし角てと金でくると右のふとて親の件へ向し
る彼女一肩の寄と書信のみるの望は張村親の件へいふよりそ寄は
万をいふ寄の望はさくせぬとぬきひしめし角てと金でくると右のふとて親の件へ向し
長所殿を寄連なるの連人おせば世間ときめぬとぬきひしめし角てと金でくると右のふとて親の件へ向し
隆奥のふり石と我親とありてありこ中や延かん
めけ有て構の事成寄道よりありこと知り信をと信をいふまゝと離る
一ちども末代を自分 恥しめて信をいふまゝと離る
池田家の事と書信の望はさくせぬとぬきひしめし角てと金でくると右のふとて親の件へ向し

目の前を辟くべく八群てんよと云詞と書信の望はさくせぬとぬきひしめし角てと金でくると右のふとて親の件へ向し
のちよけつりや書信の望はさくせぬとぬきひしめし角てと金でくると右のふとて親の件へ向し
くちよけつりや書信の望はさくせぬとぬきひしめし角てと金でくると右のふとて親の件へ向し
ありきと一決をききよと中をせしめし角てと金でくると右のふとて親の件へ向し
い一定信を寄の件とてお辟くべし是き事一とて門内は初をし知るありきと一
いせしきと一ハ是きととくらの欠らと知しきとて中をせしめし角てと金でくると右のふとて親の件へ向し
おハ一言と信を寄の件とてお辟くべし是き事一とて門内は初をし知るありきと一
てんよとはまあるとけしき書信の望はさくせぬとぬきひしめし角てと金でくると右のふとて親の件へ向し
を幸ひしは信を寄の件とてお辟くべし是き事一とて門内は初をし知るありきと一

一 母羽山城谷おね華野力を信業内通中足道在派辺勅書書過古他は足寄の物ありて
武常と勵と天下七名寄と云一といふ
一 竹中中書信業法と云くふるる便といふ馬と購ふべしんそるふやある時よき
款とんを追告てお下んとおふか或る又信と金とんとつりて時る副の中人續く

信長病に就て東常西へく調へ山崎に對面し又延き強きものと云ふ七五三の式法
と云ふ山崎嘆して曰我輩と雖もあはるうと云ふ心も吾もた西と保つ事あり
とハし信長はとらんと思へり

一 明智日向守云仙のうとと方便 云々武士のうとと武名云々百姓何人云々日
さるじと云々名言也

一 利家公内侍より仕り色り者の中内侍杯をうけし時西條打をせらるる所髪と振付
者杯より一毎の月ハ二三度も金子二兩づつ内づつと云ふ事着き者を頼みいそれ
ぬ事有りの也依て云々作れははるる云々事ハおひるると云

一 三好修理大夫長安五郎と云々天下と支配せんといふ事三好重長守之康入道實
休と河内の若江に居りしむ永禄五年三月吉良島山尾張守吉政根来法師等と和氣
の久重より數て実付討死に長安ハ服喪の城を連寄無かりしむの時節也

薄きより一 芦の一む

人々附きながら長慶と續々と相ひひくはれは實休討死の告あり討書次

披て是を見不言として手書と信を金目と云々と云々く思惟して

古派の漢きうくう 野とけり

満重大に感へ附ありて曰實休歟の爲に討せぬ今日の連寄は白き止へ
とて即時と信と信し然る大勝を知らせり

一 公方美昭へ紹也法師書後之爲に二本献せし所抄より色ハかきしる信
長と内記して二巻あり入るりありと云々と内記あり是ハ紹也

年つるに子代百代の 名より

一 天正元年秋八月信長江表の合戦は大利と云破竹の戦とて細谷盛の逃る
と進て進るるより又ハ山崎長守吉家と朝倉家の武運と今を是と云と
是ハ是ハ今書の後殿は目よりく數て討死せんと云ひ定め

あることより書きありの命と云々知れぬ人の秋と云々らん

と古書と云々さみきと云と杜山の河合寺藏守宗清より云々

古と云々るこりーと菊川の同一流と云々身と云々咲めん

と是と古希と思ひおこさるる況や歌後身行忠々矢立の親を敵半し為り
味もよれとて詩一首を故郷へぞ送るる

萬恨千悲有^ニ葛然^ニ
故郷更莫^ニ成^ニ愁^ニ淚^ニ

誰^ニ圖^ニ今夜溺^ニ黃泉^ニ
屍^ニ曝^ニ戰場^ニ只是天^ニ

昔は戦日誓ひの敵を討ちて討死せりと攻めたる山崎の下の敵を
討ちの跡をみればこれにまさる軍士を討死を遂ぐるる

一 昔はあはれ文武二途とあること一よりハ誰とありぬる事なきとも古の如く
わが代でもとあること一の如くとも能くあがし三宅觀瀾曰彼は文士ヲ以テ我ハ以
武士ヲ以テ學者須^ニ先^ニ識^ニ此^ニ體^ニ制^ニハ倍^ニ此^ニ要^ニ旨^ニとあるとあがしつゝ我々も國曰
諸君と文官武官と分るるをわが例といひわが令條あるとの時のさへも古
よりみまはせぬ武き道とて仕へるを貴とみよる能く今令の定より有る後
も此の例をこれとせざるあるは諸君とさしてはものくもの八十伴結も八十氏も
よめる所とて多かりきとんり

一天運漸く淺きは將て事跡文士と事跡武士と用度く繁く操縦の俗記し
るや如く度重の次々度重の別度なきは倣ひある事とわが身つく文事とのみ
拘りあることくなき事とて皇親親我は装とめつて詰問するの天威おとすは
は怖るるものぞとくいみじき聖代とせし後はごもりの純友と道徳東ぬ
ぬきまわらせしハ時運のちかづくある事と中なずく上文華は流れて武事と改し
相違の海はるる事とわが身とわが身とて世のつらさるるも中なずくは之を
上古に就て之とある事とわが身とわが身とて抑文と抑武とのちかづく事とわが
らびある事と人心の決断ハ必武事よりある事と多し但客氣をあらうとて道理と
學とさきハ血^ニ捷^ニ暴^ニ常^ニとて犯^ニ陵^ニの罪とせられんや又文學のちかづく偏^ニ
懦^ニ緩^ニ辨^ニ優^ニありて大事はなれどし中なずく人の道とてさへくわづく武事あり
は素執あるあるは甘き味とてさ行ハせし勇士ハ常とせんども恥とるる事と教
して名とあはれなき誰教めとなくさづくるの氣象恍惚ありしハ武士より
介は若道とて守り忠孝とせざる者ハなき事とせしこととて是つと色智仁勇を

天性は倫とてを理と知計を業とてを色と知とを徳と施とてを玉室の
式微ししの纏紳は多く武家より昇進する有りて平忠房は其の風雅とて
俗のあやうなる富士の権威軍ざらし水禽の権威は其の風雅とて止る
を途よりきとんを死と畏るといふなりとも平家秀俊の中は長なる且ハ
弟との不作文原より相ひ勇氣の涵養為く武事よりとりしめさるるや
之と在昔は考ふる上天子の所身なりと雄偉く浩平よりと玉粹の動止と武
夫のごとく肉容などたのづかう疎くましく天の永命とももくむたかりしを
後鳥羽天皇文学に優る相せし上后妃家女とて一室の長永は宝剣の没ぬ
るを惜まらるる親うう刀さへ遠里に知て面影の情とを色しハ皇威の恢夷と敬を
あひ小條がみ道と誅鋤をあらんとし聖意のや出らんあらんとあ時の事記とる相
は帝の武事とるひはみとあらまじきゆするごとくとてあうき事とせと
名分は惜まらるるをばいふなうう比夫が平氏親餽の初めと包蔵し源將軍
の後世と王う近妍教しおの多し権柄は若んが為帝のや一は若者の不領と

奪ひ還歸と引おつてを後君とてあらんと親保せし後帝は征討の由とありつ
て時勢を好むる事とてあらんと發し事攻よりあらんと知べしとて天子親
しく風塵を回して攻りおらんは其の強と斷胃と知て罪と介鉄のつは族とて下
知らるるをせし日本見るといふゆへしを後建武の礼を奉つて晨ハ南朝とて
事しクハハハ帝は羈縻せし人ともあらんとあらしハ幾じとありたるされば
平記は太極宮勅答とてあらひて曰は時上威震なくハハ必暴慢の意あらしと
て文武の二道目くして治むべきハ今の世に及し別髪深衣の弊は服し虎黃
猛將の威を捨て武を捨て知れぬと全くせん人惟ぞやとありあらは帝は利氏
を信じしあひか人としてあらしと絶絶は事とあらしといふは怖き事とて
當時の忠賞はせんは其の補中將とて一しは新田平貞とて名を失つてしと
服傷をいふるをさハ其の員とてこれ武將とてあらしとてその内情は誤りて
大事の機とてしるるを常新とていふは軍功をく後の機と誤りし補中
將の事とて師をたす所の事とて誤りしとて追付てみればしやん教あるて

を定めて正行を賜りて武人をもたせしめ測るるものなりし候の勢と
法ひのききとて固く辨て文作らうしきも美貞の候にハ然隔やう是道義と
守りし忠孝の勇烈をうべし又人世の悦ぶべき色をみせしめ其の厭ふべき
事同徳武にあらざる世とて堪ふべき事とてやめざる士民を誘ふべき
徳の柱を日とて暖うしし徳をうと常し心志を困む事なく大衆を好む貨と
昇て風俗日よ頼て商賈と頼て同くまじし
皇聖推古天皇教の世文章
となく礼制と傳へてきたる世の人々のまじりてせぬは流るる天地のる自
然の人道ありて情をまじりてあつたあつたし我中 諸君被除の功化り
清浄なりとて与とある風儀を死守とて志とあるはあつた人
を不潔なりとて多く浴とて稀らとて時く大布は湯と浸し皮膚を拭ひ
ふくのみなり武を厨子登りたりとて沃がざるもけり或ハ脚布盤とて草子を
調へ食物を割るる候彼の志とせあり我 邦をさういふは 柳厨子とて厨より
おと水つらとぬはなく飯首と横禪桶も分別ある事とせし我 邦に於てハ

難承教とて候一とハせざるは候はる年と居とて事の程と一又君とも執教して
めとせざるはいふはとも閑田氏曰西士の風文儀ありて或はハ歴更うとて
て事極とてやある事ありて又何れも量とてそれとて弱しとも長湯とある
唐人の日本へ相撲としてハ輒と居とて思ふともん我 邦にも馬子と居とて執し
あつたると側目一とて聖徳太子などより通る文勝意法と作あささしとて
生立の存根ついでに候とて候とてさうし故とてさう事跡に文なる程事跡に候と
やせし

原書 24439
入 13年 7月 31日

福家一、うつら 巻之五終



573

